

紀 要 第三十九卷 第一号（通卷五十号）一二～二四（二〇一五）

升底切『金葉和歌集』零本についての書誌的報告

木下 華子・新美 哲彦

一、はじめに

ノートルダム清心女子大学附属図書館には、「特殊文庫」と名付けられた貴重な古典籍資料群が存在する。この特殊文庫の蔵書のほとんどは「黒川文庫」と「正宗敦夫文庫」の二つの古典籍コレクションから成るが、その形成に深く関与・貢献したのが、現在の日本語日本文学科の前身である国文学科発足当初の教授・正宗敦夫（二八八一～一九五八）である。

黒川文庫は、江戸時代後期の歌人・国学者の一族である黒川春村・真頼・真道三代の蔵書を核とする黒川家蔵書のうち、歌書類を中心とする約一〇〇〇点（三〇〇〇余冊）を収蔵する。この黒川家蔵書の購入は、一九五二年四月の国文学科発足の際、二代目学長シスター・エーメー・ジュリーの姉であるミセス・エレノア・カーの寄付に拠って実現したものであるが、その一切を取り計らったのが正宗敦夫であった。敦夫は、購入に際して東京神田神保町の一誠堂書店に泊まり込み、黒川家旧蔵本歌書類が小規模な単位で分売されて散逸する事態を防いだと伝えられている。

正宗敦夫は、自身もまた、古典籍の一大蒐集家であった。彼が研究のために一生をかけて蒐集した典籍・文書類は、現在の財団法人

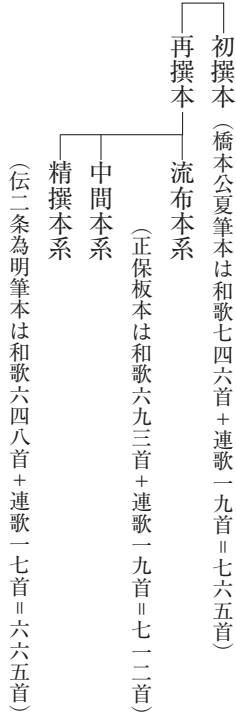
人正文庫（岡山県備前市穂浪）と本学の正宗敦夫文庫とに分蔵されている。正宗敦夫文庫は、敦夫の蔵書のうち歌書類を中心とした古典籍約一〇〇〇点（四〇〇余冊）が、一九六五年に本学に移管されたものだ。現在、黒川文庫と正宗敦夫文庫を併せた本学特殊文庫の歌書コレクションは、全国有数の規模を誇り、多くの古写善本を有するものとして高い評価を受けているが、それは正宗敦夫の無私の尽力なしには達成され得ないものであったと言えよう。

さて、この正宗敦夫文庫には、平安後期に成立した五番目の勅撰和歌集『金葉和歌集』の古写本一三点が収蔵され、現在、『金葉集』の学術的理解の上で欠かすことのできないほどの充実したコレクションとなっている。この古写本群については、海野圭介「正宗敦夫旧蔵升底切本『金葉和歌集』考」に概要が記されており、海野の論考を参照しつつ列挙すると以下のようになる。

- | | | |
|------------------------------|-------|----|
| 1 伝慈鎮筆『金葉和歌集』「I・13」 | 鎌倉前期写 | 一帖 |
| 2 升底切『金葉和歌集』零本（存巻七―一〇）「I・23」 | 鎌倉前期写 | 一軸 |
| 3 伝藤原為家筆『金葉和歌集』「I・12」 | 鎌倉中期写 | 一帖 |
| 4 伝二条為明筆『金葉和歌集』「I・14」 | 南北朝期写 | 二帖 |

- 5 伝二条為忠筆『金葉和歌集』〔I・15〕 南北朝期写 一帖
- 6 伝聖護院覺譽親王筆『金葉和歌集』(存卷七―一〇)〔I・24〕 南北朝期写 一帖
- 7 『金葉和歌集』(證悟奥書本)(存卷一―三、六―一〇) 室町後期写 一帖
〔I・16〕
- 8 橋本公夏筆『金葉和歌集』〔I・18〕 室町後期写 一冊
- 9 山崎宗鑑筆『金葉和歌集』〔I・17〕 室町後期写 一帖
- 10 『金葉和歌集』(空済奥書本)〔I・19〕 室町後期写 一帖
- 11 靈岑筆『金葉和歌集』〔I・20〕
- 12 『金葉和歌集』〔I・21〕 天文一六年(一五四七)写 一冊
室町末江戸初写 一冊
- 13 『金葉和歌集』〔I・22〕 江戸中期写 一冊

ここで、『金葉集』伝本の全体像を確認しておこう。『金葉集』は、天治元年(一一二四)四月の下命から数年の間に、初度本・二度本・三奏本と三度の改訂を経て成立したが、後世、最も流布したのは二度本である。この二度本もまた、歌数や排列等が様々に異なる伝本が残されており、以下のように大別される。



括弧内には、その分類の代表的伝本の総歌数を示したが、これを見ると、初撰本から再撰本へと精撰が進み、再撰本の中でも、流布本系から精撰本系へと移行するに従って、収載する和歌が絞り込まれていく様子がうかがえよう。

正宗敦夫文庫が所蔵する『金葉和歌集』は全て二度本であるが、4伝二条為明筆本は精撰本系のうち最も歌数の少ない伝本であり、最終稿本系の伝本と考えられている(新編国歌大観の底本)。逆に、二度本の中でも最も収歌数の多い初撰の段階の面影を伝えるものが8橋本公夏筆本であり、両者の間には百首もの差が存在する(この8橋本公夏本の固有歌は、撰集過程における除棄歌とされ、新編国歌大観解題において「橋本公夏本拾遺」として掲載)。その他の伝本のうち、例えば、3伝藤原為家筆本は、精撰本系に分類されるものの、総歌数は六八四首(和歌六六六首+連歌一八首)とやや多く、精撰本系の中でも、やや早い段階に位置している。また、5伝二条為忠筆本は、総歌数六七二首(和歌六五四首+連歌一七首)であり、4伝二条為明筆本の一步手前の段階を示すかと考えられる。

前置きが長くなったが、本稿で取り上げるのは、これら正宗敦夫文庫所蔵の『金葉和歌集』コレクションのうち、2升底切『金葉和歌集』零本(存卷七―一〇)〔I・23〕である。当該本は、古筆了佐(一五七二―一六六二)による奥書極「為家卿御若年之時之御真筆」により、長きにわたって藤原為家(一一九八―一二七五)を伝承筆者とする鎌倉中期頃の写本と考えられてきたが、近年、海野圭介の研究(前掲論文)により、藤原家隆(一一五八―一二三七)筆と極められ、「升底切」と呼称される古筆切の僚卷であることが明らかになった。海野前掲論文が、

升底切は、『古筆名葉集』（文化五年（一八〇八）刊）の「家隆」の項目の筆頭に「升底切 六半金葉哥三行書 五号升ノ大サ也」と挙げられ、江戸時代より賞翫されてきた名物切である。三大手鑑と通称される国宝手鑑「藻塩草」（京都国立博物館蔵）、同「翰墨城」（MOA美術館蔵）、同「見ぬ世の友」（出光美術館蔵）といった代表的な手鑑の何れにも収められる鎌倉前期を代表する名筆の一つであるとともに、現在知られている『金葉和歌集』伝本のうち最も早い時期の写本と推測される、極めて貴重な資料である。従来三十葉ほどの伝存が知られていた升底切であるが、この度、一挙に数倍の量が出現したこととなる。

と指摘するよう、当該本の資料的価値は極めて高いものである。

二、書誌

当該本の書誌・伝来については、すでに先述の海野論文に詳しく報告されている。本稿も海野の研究に負うところが大きく、新見を提出するものではないが、以下に基本的事項を摘記しておく。

・升底切『金葉和歌集』零本（存巻七―一〇） 函架番号I・23

卷子装（本来は列帖装であった冊子の料紙を相剥ぎして卷子装に改めたもの）。一軸。縦21.6cm。花文織出金茶色地巻出。外題なし。内題、「金葉和詞集巻七（十）」（巻八・九は巻首部分欠）。見返し、金箔布目押。本紙の料紙は楮紙打紙。一葉は縦15.2cm×横14.7cm。相剥ぎされた現状の紙数は全一九〇葉であり、内訳は巻七〓三二葉、巻八〓四八葉、巻九〓六〇葉、巻一〇〓五〇様

となる。これに加えて、巻尾に奥書極（二葉）を付す。一面9行書（第20葉のみ10行書）。詞書は1行に9〜13字程度で書かれ、作者名は改行して1行分を取る。ただし、「題しらず」「題不知」となる場合、作者名は改行せず追い込み。和歌一首は3行書き（一・二句／三・四句／五句という配当）。奥書なし。巻尾に付された古筆了佐による奥書極は、次の通り。

右金葉集下巻従第七

至第十為家卿御若年之

時之御真筆也尤可謂家珍

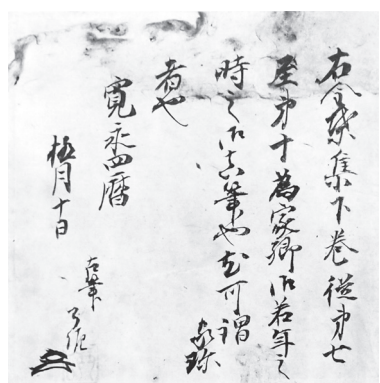
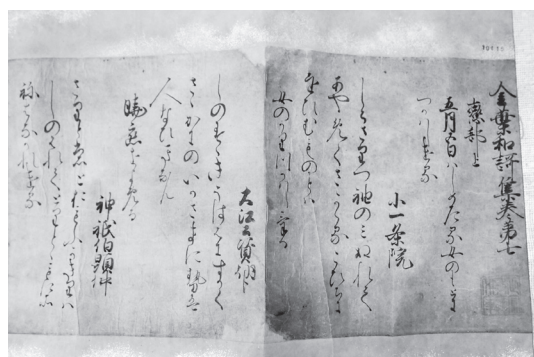
者也

寛永四曆

古筆了佐（花押）（琴山印）

極月十日

巻頭に「正宗／敦夫／文庫」の方形朱印。桐箱が付属し、箱表中央に「為家金葉集^{第七}」と墨書。



古筆切の需要のあり方との関係に言及しており、巻七〇の欠脱に關しても「歌柄の良い箇所が切り出されたため」と推測する。本稿も、この見解に随いたい。

なお、当該本の欠脱箇所については、次の通りである（詳細については、海野論文に報告あり^{注4}）。「異本歌」の語を付した歌番号は、『金葉集』二度本・再撰本系で流布本とされる正保板本に含まれ、最終稿本系の伝二条為明本では除棄された歌である。五〇首程度が存在し、『新編国歌大観』においては、「異本歌」として収載されている。

巻七（恋上）

- ①三五六番歌詞書途中から三五九番歌の四句まで。
- ②三八〇番歌から三八三番歌の二句まで。
- ③三九二番歌から三九四番歌詞書まで。
- ④四〇〇番歌作者名から四〇三番歌作者名まで。
- ⑤四一三番歌作者名から巻尾の四二〇番歌まで（巻八巻首に連続して欠脱）。

巻八（恋下）

- ⑤巻首から四二三番歌詞書まで（巻七巻尾の欠脱から連続）。
- ⑥四三二番歌五句から四三五番歌作者名まで。
- ⑦五〇八番歌から巻尾の五一五番歌まで（巻九巻首に連続して欠脱）。

巻九（雑上）

- ⑦巻首から五二二番歌四句まで（巻八巻尾の欠脱から連続）。
- ⑧五七七番歌詞書途中から五八一番歌二句まで。
- ⑨五八四番歌三句から五八七番歌詞書途中まで。

奥書極には、「金葉集下巻從第七至第十」とあるため、了佐が当該本を極めた寛永四年（一六二七）の段階で、すでに巻七〇巻一〇のみが存する零本であったということになる。『金葉集』は本来全一〇巻、巻一〇が四季部（春・夏・秋・冬）、巻五が賀部、巻六が別部、巻七〇八が恋部上・下、巻九〇一〇が雑部上・下という部立である。すなわち、当該本は恋部上・下、雑部上・下のみを取りめるものとなるが、この巻七〇一〇の中にも、一六箇所の欠脱が認められる（後掲）。このような残存状況に至った理由について、海野は、「古筆切として流通する資料の通例として、四季部、賀部などが好まれて裁断され、手鑑や軸物とされる例が多かった」という

⑩ 五九〇番歌作者名から五九二番歌まで。

⑪ 五九四番歌作者名から五九九番歌まで。

卷一〇（雑下）

⑫ 六二六番歌から六二八番詞書途中まで。

⑬ 六三二番歌から六三四番歌、さらに六三四番歌の直後に位置する未詳歌四句まで（未詳歌は五句「いかてしらまし」のみ存）。

⑭ 六四〇番歌三句から異本歌七一〇番歌（六四二番歌の次）詞書まで。

⑮ 六四七番歌詞書途中から六四八番歌付句作者名まで。

⑯ 補遺七一二番歌（六六三番歌の次）前句から巻尾まで。

三、当該本の原態推定

書誌で述べたごとく、当該本は、手擦れや綴じ穴の跡、大きさから見て、枡形本の列帖装を、相剥ぎして卷子本に仕立て直したものであるが、現状としては先述したごとく、16箇所欠脱部分が存在する。

この16箇所の欠脱部分を、新編国歌大観の文字数で計算すると、それぞれ①167字②154字③190字④156字⑤578字⑥154字⑦898字⑧345字⑨135字⑩161字⑪322字⑫165字⑬170字⑭155字⑮123字⑯149字となる。

当該本は1丁の文字数が150字^{注8}180字ほどであるので、それをもとに概算すると、それぞれ①1丁②1丁③1丁④1丁⑤4丁⑥1丁⑦6丁⑧2丁⑨1丁⑩1丁⑪2丁⑫1丁⑬1丁⑭1丁⑮1丁⑯1丁、計26丁の脱落と推定される。

これらの脱落丁数を、現存の丁の間に入れたのが、資料1「丁数」

である。

現存95丁に脱落26丁を合わせて、墨付き丁数121丁であったと推定されるが、さらに興味深いのは、脱落丁がほぼシンメトリーに配置されていることである。

列帖装は、複数枚の紙を重ねて折ったもの（一折）を複数重ねた上で糸綴じした装丁であるので、一紙が抜けた場合、必ず脱落はシンメトリーとなって現れる。そして、脱落がシンメトリーに配置される中心が折りの中心となる。

つまり、シンメトリーに配置される中心を定めた上で、丁数を考えると、原態の折りの数も、推定可能となる。資料1「推定1」「推定2」にその推定を示した。

シンメトリーとならない脱落③は、対となる丁が表紙裏に挟み込まれていると推定した。また、同じくシンメトリーとならない脱落⑯は、墨付き最終丁であることから、書写奥書などともに、卷子本に改装される際に意図的に切り取られたなど、特別な事情を想定することができるとは考えられない。

同様に脱落⑤⑦も、それぞれ4丁6丁と脱落丁数も多いが、巻8、巻9巻頭でもあることから、改装の際に意図的に抜かれた可能性が高いかと考えられる。

なお、卷子本への改装は、列帖装の一紙を切断、相剥ぎした上で、歌順に並べて裏打ち紙に貼り付けていくという手順を踏む。

当該本のごとく、脱落丁がほぼシンメトリーに配置されるという事実からは、切断、相剥ぎした後に脱落したのではなく、切断する前に一紙ごとく抜けているという事情が浮かび上がってこよう。

ここで推定した原態を整理する。

[illegible][illegible]

[illegible]

四、本文

(一) 異本歌の収歌数

当該本の本文については、平澤・海野ともに、二度本・再撰本のうち、精撰本系に位置すると述べる。再撰本の中では、最も収歌数の多い流布本系と最終稿本系の伝本だと思われる4伝二条為明筆本の間には五〇首程度の差があり、これを異本歌と呼ぶことは先述した。当該本は、この異本歌を数首含んでいるため、精撰の過程においては、伝二条為明本よりも前の段階の本文の姿を伝えるものであると言えよう。

当該本が収める異本歌として確実なものは、巻一〇・雑下に見える次の五首である（読点・濁点は任意に補った）。

後三条院かくれおはしましてのち、五月五日、一品宮の御前に菖蒲ふかせ侍けるに、さくらのつくり花のさ、れたりけるを見てよめる
藤原有佐朝臣

・あやめぐさねをのみかくる世中におりたがへたるはなざくらかな
(七〇五〈六〇六の後〉)
例ならぬことありけるころ、いか、などおもひつゝけてこ、ろぼそさに
源行宗朝臣

・いかにせむうき世中にすみがまのはてはけぶりとなりぬべきみを
(七〇七〈六二八の後〉)

源俊頼朝臣

・よものうみのなみにたゝよふみつくをもよるべのなみにひきならしそ
(七一〇〈六四二の後〉、当該本では詞書が欠脱)
・はななくぎはちるてふことぞなかりける
読人不知

かぜのまに／＼うてばなりけり

(七一前句〈六五九の後〉)

前太政大臣家ゆふしで

(七一一付句)

・鶉のみづにうかべるをみて

頼算法師

(七一二の詞書と前句の作者名〈六六三の次〉、連歌は欠脱) また、当該本の場合、欠脱部分に異本歌が含まれている可能性がある。海野論文がすでに指摘するが、以下の箇所である。

⑦五〇八番歌から五二二番歌四句まで（巻八巻尾から巻九巻首にわたる）の欠脱中、五一五番歌の後に七〇〇・七〇一番歌が存在。

⑨五八四番歌三句から五八七番歌詞書途中までの欠脱中、五八四番歌の後に七〇三番歌が存在。

⑩五九〇番歌作者名から五九二番歌までの欠脱中、五九二番歌の後に七〇四番歌が存在。

これらについて、「三、当該本の原態推定」での結論を踏まえて、検討してみよう。順序が前後するが、⑩については、資料1に拠ると欠脱は1丁分であり、一面9行の行数で換算すると18行となる。欠脱部分の本文を、本学所蔵の伝二条為明本の表記を用いて、「二、書誌」に示したような升底切の一面9行仕立てに配置してみると、以下のように、異本歌を含まない状態で18行に渡る可能性が高い（行頭に歌番号、行末に予測し得る行番号を付す）。

⑩

590

忠快法師

1 うちがはのそののみくづと

2 なりながらなをくもかゝる

3 やまぞこひしき

4

591 いゑを人にはなちてたつ
とてはしらにかきつけ侍
ける

7 6 5

周防内侍

すみわびてわれさへのきの
しのぶぐさしのぶかたく

1 9

592 賀茂成助にはじめてあひて
物申けるついでにかはらけ
とりてよめる

4 3 2 1

津守国基

き、わたるみたらしがはの
みづきよみそこのこゝろを

8 7 6 5 4 3 2 1

他の伝本を用いての推測であるため、確定的なものではないが、^⑩において異本歌である七〇四番歌が含まれる可能性は、かなり低いと思われる。

続いて、^⑨を見てみよう。欠脱は1丁分18行である。先程と同じ作業を行うと、七〇三番歌を含まない状態では全体は15行と推定され、丁分に満たない。ここで、『新編国歌大観』所収の正保板本の表記によって、五八四番歌の後ろに七〇三番歌を補ってみると、次のように19行になり、1行分多くなってしまう。

^⑨

584 ふゆのよもと、こほらぬは
なみだなりけり

2 1

703 皇后宮美濃
よなよなはまどろまでのみ
あり明のつきせすものを
おもふ比かな

6 5 4 3

585 上陽人苦最多苦老亦苦
といふことをよめる

源雅光

むかしにもあらぬすがたに
なりゆけどなげきのみこそ
おもがはりせね

586 青黛画眉々細長といへる
ことをよめる

源俊頼朝臣

さりとともかくまゆずみの
いたづらにこゝろぼそくも
おひにけるかな

としひさしく修行し

587

この状況については、二通りの考え方があろう。第一は、^⑨の欠脱1丁分のどちらかの面が10行書だったとする考え方である。「二、書誌」で述べたように、当該本は一面9行書であるが、うち一箇所（第20葉）のみ10行書となっている。このような現象がここでも起こり得るならば、七〇三番歌が存在した可能性が考えられる。第二は、すでに海野が指摘するよう、異本歌以外の和歌の詞書部分に通本との長文の異同が存在する可能性である。これら二者については、現状では決め手を欠き、保留とする他ない。

最後に⑦であるが、この欠脱は6丁分と推定されるため、行数では54行である。⑨⑩同様の作業を行うと、異本歌を含まない状態で推定42行となり、4丁と3分の2の分量となる。ここに、正保板本の表記によって異本歌七〇〇・七〇一番歌を加えてみると、この二首で12行分、すなわち1丁と3分の1の分量となり、両者を併せると6丁54行分となる。

⑦ (部分)

| | | |
|-----|--------------|----|
| 700 | 寄夢恋をよめる | 1 |
| | 源行宗朝臣 | 2 |
| | つらかりし心ならひに | 3 |
| | あひみても猶夢かとぞ | 4 |
| | うたがはれける | 5 |
| 701 | 俊忠卿家にて恋の歌十首 | 6 |
| | 人人よみけるにおとしめて | 7 |
| | あはずといへる事をよめる | 8 |
| | 源俊頼朝臣 | 9 |
| | あやしきもうれしかりけり | 10 |
| | おとしむるそのことのはに | 11 |
| | かかるとおもへば | 12 |

あくまでも推測の領域ではあるが、⑦の欠脱部分に七〇〇・七〇一番歌が存在していた可能性は、かなり高いと見てよい。

さらに、海野論文によると、升底切と認定される古筆切のうち、現在、異本歌と確認されるのは、六六八番歌（巻一・春、五六番歌の後）、同六八二番歌（巻二・秋、一二五三番歌の後）の二首である。そうすると、当該本はその原態において、少なくとも九首の異本歌

を含んでいた可能性が考えられることになろう。その内訳は和歌七首と連歌二首であり、巻一に一首、巻三に一首、巻八・九にかけて二首、巻一〇に五首という配置になる。もちろん、この数字は下巻（巻七・一〇）で行った想定に、確認しうる上巻（巻一・六）の異本歌を加えたものであるから、上巻部分にはそれ以上の異本歌が存在したかもしれないのだが、一旦、この九首という数字を用いて、他の精撰本系の『金葉集』伝本と比較してみよう。

本学正宗敦夫文庫所蔵の『金葉和歌集』伝本のうち、5伝為忠筆本は、総歌数六七一首（和歌六五四首＋連歌一七首）であり、こちらには4伝二条為明筆本（和歌六四八首＋連歌一七首）よりも和歌が六首多い。また、3伝為家筆本は総歌数六八四首（和歌六六六首＋連歌一八首）であり、4に比べると、和歌一八首・連歌一首が多く含まれている。「一、はじめに」では、5は最終稿本と考えられる4の一步手前、3は精撰本の中でもやや早い段階のものと述べた。この精撰過程への位置付けは、一概に歌数の多寡によって定められるわけではないが、一つの指標とはなり得よう。

『金葉集』二度本が精撰されるにつれて歌数が絞り込まれる傾向があると考えた上で、先に見たように、当該本には少なくとも和歌七首・連歌二首の九首の異本歌が存在するという仮説に立てば、当該本は、5伝為家筆本と3伝為忠筆本の間位置することになる。そうすると、二度本・精撰本系中の伝本においては、少々早い段階の本文の姿を伝えるものということになるうか。散逸した上巻における異本歌の存在を想定すれば、最終稿本一步手前の5伝為忠筆本よりも以前の段階に位置付けられるとして差し支えないだろう。

(二) 異本歌である卷九・雑上・七〇〇番歌の存在

先に、⑦の欠脱部分には、異本歌の七〇〇・七〇一番歌が存在していた可能性を述べた。この七〇〇番歌は、

寄夢恋をよめる

源行宗朝臣

・つらかりし心ならひにあひ見ても猶夢かとぞうたがはれける
であるが、実は、卷七・恋上の三八一番歌に、

後朝恋の心をよめる

源行宗朝臣

・つらかりし心ならひに逢ひ見てもなほ夢かとぞ疑はれける
として、完全に重複する(当該本では、三八一番歌は②の欠脱に含まれていて伝存しない)。このような重複歌は、松田・平澤が指摘するように、精撰作業の中で除棄されるべきものであろう。実際、4伝二条為明本の段階では七〇〇番歌は落とされておき、最終段階において、当該歌は卷七・恋上・三八一番歌として集中に位置する。すなわち、七〇〇番歌は、それを含む本が精撰過程の早い段階に位置していたことを示唆する大きな指標になり得るのだ。七〇〇番歌存在の可能性が導く当該本の位置は、(一)での結論と齟齬しない。屋上屋を重ねるような推測ではあるが、当該本の本文については、以上のように考えておきたい。

五、終わりに

ここまで、升底切『金葉和歌集』[I・23]の書誌的報告を行うとともに、欠脱部分を復元的に考察することによって原態への推測を試みた。

当該本、そして本学・正宗敦夫文庫所蔵の古写本群を含め、『金

葉和歌集』には多くの古写本が存在する。これらは、その多くが松田・平澤の先行研究に取り上げられ、ある程度の整理・分類も行われてはいるものの、本文そのものの研究については、進展しているとは必ずしも言えない。

海野は、多くの古写本が残る『金葉和歌集』について、全ての写本の成立を直線上に位置付けようとする合理的には解釈し難い例が残ることも事実であり、和歌の出入りや所収歌数を基準に行われた伝本整理には自ずと限界もあるように思われる。

とし、「古写本それぞれに戻った本文の検討」の必要性を説く。首肯すべき見解であり、本稿で取り上げた升底切についても、また同様であろうが、詳細な本文分析については後考を期し、ここで稿を閉じることとしたい。

注1 『日本古典文学研究の新展開』(笠間書院、二〇一一年)所収。

本稿における海野の研究や見解は、全て当該論文を指す。

注2 松田武夫『金葉集の研究』(山田書院、一九五六年)、平澤五郎『金葉和歌集の研究』(笠間書院、一九七六年)。本稿における松田・平澤の研究や見解は、全て当該書を指す。

注3 平澤前掲書(注2)。

注4 海野論文によると、欠脱部分のうち、以下の箇所については古筆切の存在が確認されている。②三八〇番歌、三八一番歌、⑦五一六番歌作者名・和歌から五一七番歌、⑦五一九番歌、⑨五八六番歌、⑭六四〇番歌三句から六四一番歌四句。

注5 欠脱の前の丁が六三二番歌で終わり、後の丁が「いかてしら

まし」という不明歌第五句で始まり、六三五番歌に続くため、六三四番歌第四句までの字数を欠脱として計算。

注6 欠脱の前の丁が六四〇番歌第二句まで、後の丁が七一〇番歌詠者名・和歌から、六四三番歌に続くため、六四〇番歌第三句から六四二番歌までと七一〇番歌詞書の字数を欠脱として計算。

注7 欠脱の前の丁、六六三番歌の次に七一二番歌の詞書・詠者名を記すため、七一二番歌和歌と六六四・六六五番歌の字数を欠脱として計算。

注8 字数のみでは確定しにくいものの、後述する如く、脱落がシンメトリーになること（対となる丁数）を考え合わせた上で計算した。

注9 ただし、奥書・識語などが巻末にある場合、墨付き丁数が増えることも予想される。

注10 海野の指摘によると、欠脱部分のうち、五八六番歌は古筆切（6行書）として存在する。

（きのした はなこⅡ本学 文学部 日本語日本文学科）
（にいみ あきひこⅡ早稲田大学 教育・総合科学学術院）

キーワードⅡ金葉和歌集、升底切